

**日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）  
中間評価（26年度採用課題）書面評価結果**

領域・分科 （細目）	社会科学・心理学（実験心理学）		
研究交流課 題名	心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成		
日本側拠点 機関名	京都大学 霊長類研究所		
研究代表者 （所属・ 職・氏名）	京都大学高等研究院・特別教授・松沢 哲郎		
相手国側	国名	拠点機関名	研究代表者所属・職名・氏名
	ドイツ	マックスプランク進化人類学研究所	Department of Evolutionary Genetics, Director, Svante PÄÄBO
	イギリス	セントアンドリュース大学	School of Psychology & Neuroscience, Professor, Andrew WHITEN
	アメリカ	カリフォルニア工科大学	Division of the Humanities and Social Sciences, Professor, Ralph ADOLPHS

総合的評価（書面評価）

評 価

- A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
- B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
- C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
- D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。

コメント

本課題では、これまで多く研究されてきたヒト・チンパンジー・ボノボというヒト科3種に加え、ヒト科のオランウータン、さらにはヒト科以外の大型哺乳類であるウマなどを対象とした国際的な比較認知科学研究が順調に進んでいる。わが国においてヒトの心の起源に最も接近している研究課題である。国際的な評価も高く、今後の発展も期待される。

学術的側面については、これまでに発表された学術論文2編のうち、相手国との共著論文はウマを扱った Tomonaga et al. (2015)のみであり、当初の研究交流計画の目的であるパン属2種に関する業績について現時点では十分とは言い難いが、学会発表は国外・国内とも積極的になされていることから進捗状況としては良好と思われ、今後が期待される。中間評価の時点では、それぞれの拠点の特性を生かした共同の研究内容を生かした交流がさらに望まれる段階であると思われる。特にアメリカの連携機関の最大の特徴である情動に関する神経科学の成果がこれまでなかったことは残念である。神経科学の成果を裏付ける進化的な枠組みの提供について、今後の課題として取り組むことに期待したい。こうした取り組みより、本課題ではさらに大きな成果を生み出すことができると考えられる。

若手研究者の養成については、派遣研究者として、大学院生やポスドク・助教の職にある若手研究者が多数研究交流に参加しており、着実に実績を積みつつある。これらの研究交流を行うための基盤となる英語力を培う体制も教育機関として与えられており、また、若手女性研究者のロールモデルを学ぶ機会も得られている。

研究教育拠点の構築については、前半の研究活動として、比較認知科学実験施設の整備、ボノボの導入など、研究を推進する上で必要な整備が完成されたと判断できる。今後は、アフリカでのフィールド調査を各研究機関と連携して行うことにより、大きな成果を期待したい。

## 1. これまでの交流を通じて得られた成果

観 点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の養成」「研究教育拠点の構築」の観点から成果があがっているか。</li> <li>・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。</li> <li>・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。</li> </ul>
-----	---

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果があがっている。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果があがっている。 <input type="checkbox"/> ある程度成果があがっている。 <input type="checkbox"/> 成果があがっているとは言えない。
コメ ント
<p>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の養成」「研究教育拠点の構築」の観点から成果があがっているか。</p> <p>学術的側面については、ポノボ・チンパンジーの観察が積極的に進められており、野外研究と実験研究を組み合わせる新たなアプローチによる研究が進められている点で学術的意義は大きい。また、海外の研究者との国内外での学術交流は、国際会議などでの情報交換にとどまらず、研究機関施設内での実験現場やアフリカなどでの野生調査においても十分になされている。しかしながら、比較認知科学研究の対象として、オランウータンやウマにも対象種を広げているが、なぜ突然ウマであるのか、飛躍があるように感じられた。</p> <p>若手研究者の養成については、大学院生やポスドク・助教などの若手研究者が多数海外へ派遣されており、特に野外研究における調査地間の国際的な相互乗り入れ、飼育下での実験研究では、比較的長期にわたって他国に滞在して共同研究を実施するなどの記載が見られる。また、英語でのコミュニケーションを日常的にとるという環境が整えられ、若手の女性研究者が、海外の女性研究者との交流を通じて自らのキャリアを考えることを、事業計画として明確に企図し、実行している点は高く評価できる。</p> <p>研究教育拠点の構築については、当該研究分野の第一人者およびそのラボメンバーが海外から頻繁に来訪できる環境となっていることから、今後につながる研究教育拠点として機能していると考えられる。</p> <p>・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。</p> <p>これまでに発表された学術論文 2 編のうち、相手国との共著論文については、ウマを扱った Tomonaga et al. (2015) のみであり、当初の研究交流計画の目的であるパン属 2 種に関する業績は十分とは言えない。ただし、国内外での研究発表件数が合計 33 件あり、今後、多くの論文が公刊されることが予想される。なお、2 篇の論文については、質的に高く、当該分野への貢献が大きいと思われる。</p>

- ・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。

本課題では、若手研究者の養成に力を注いでおり、英語での研究発表やセミナーなどを通じて、国内の他研究機関の若手研究者（大学院生を含む）にとっても大きな刺激となっていると想定される。また、本課題で招聘した海外の研究者の講演などは、本課題外の研究者にも良い影響を与えていると予想される。

## 2. 事業の実施状況

観点	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。</li><li>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。</li><li>・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。</li><li>・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。</li></ul>
----	---

評価
<ul style="list-style-type: none"><li><input type="checkbox"/> 想定以上に効果的に実施されている。</li><li><input checked="" type="checkbox"/> 概ね効果的に実施されている。</li><li><input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施されている。</li><li><input type="checkbox"/> 効果的に実施されているとは言えない。</li></ul>
コメント
<p>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。</p> <p>共同研究については、研究交流によって実現可能になった野生チンパンジーの観察と、飼育下における実験研究とがバランスよく計画され、着実に実施されている。</p> <p>セミナーについても、国内・海外それぞれにおいて毎年着実に計画・実施されている。また学会やセミナー、シンポジウムにおける議論を通じて、国際的な研究者交流も行われている。</p> <p>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。</p> <p>セミナーの開催などで物理的な交流体制はよく確立できていると判断できるが、それに伴う共同研究の成果については今後の課題である。</p> <p>・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。</p> <p>事業の性格上、研究者の派遣と招聘（受け入れ）に関わる経費がほとんどであるが、派遣・招聘人数からみて妥当な金額であり、適切に執行されていると判断できる。</p> <p>・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。</p> <p>適切に経費支出を分担できる十分なマッチングファンドが確保されている。</p>

### 3. 今後の研究交流活動計画

観 点	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。</li><li>・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。</li><li>・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究教育拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。</li></ul>
-----	--

<b>評 価</b>
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果が期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> ある程度成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> 成果が期待できない。
<b>コメント</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。</li></ul> <p>研究活動・情報交換活動・研究体制の整備のすべてにわたって、現時点まで順調であり、今後も予定通り進捗することが見込まれる。再開された西アフリカでの野生チンパンジー研究の進展と、米国での神経科学研究への期待も大きい。これまでの成果をもとに今後の計画が立てられており、具体的で実現性も高い。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。</li></ul> <p>野生類人猿の生息地であるアフリカでの感染症の流行や、全世界的なテロの危険性の増大など、事業実施に関わる困難が生じているが、情報収集、安全策の強化および緊急時の対応策を事前に計画することによって適切に対応しているといえる。また、相手国側で最もインパクトがあるともいえるアメリカ連携機関の最大の特徴である情動に関する神経科学の成果がこれまでなかったことについては、今後の課題として取り組むことに期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究教育拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。</li></ul> <p>日本側拠点機関では、優れた研究施設をすでに構築し、多くの若手研究者が本プロジェクトに参加していることから、今後の研究費獲得・継続的な活動が期待できる。物理的な交流は十分に配慮されているので、人的な交流による成果が今後は必要であると思われる。</p>